

Title	巻頭言 二つの本質の間に立たされて：理性的なるものと現実的なるもの、変えられることと変えられないこと
Author(s)	阿久戸, 光晴
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No. 48 : 3-6
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2258
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭言 二つの本質の間に立たされて

——理性的なるものと現実的なるもの、

変えられることと変えられないこと——

聖学院大学総合研究所副所長
聖学院大学学長

阿久戸 光晴

「理性的であるものこそ現実的であり、
現実的であるものこそ理性的である。」

(ヘーゲル『法の哲学』序文より、藤野涉ほか訳、中央公論社、一九六七年)

「神よ、

変えることのできるものについて、

それを変えるだけの勇氣カレイジをわれらに与えたまえ。

変えることのできないものについては、

それを受け入れるだけの冷静セレニティを与えたまえ。

そして、

変えることのできるものと、

変えることのできないものとを、

識別する知恵ウイスタムを与えたまえ。」

(ラインホルド・ニーバー「冷静を求める祈り」)

大木英夫『終末論的考察』中央公論社、一九七〇年)

二〇一〇年八月六日の広島原爆六五周年記念式典にアメリカ合衆国駐日ルース大使、潘基文国連事務総長など史上最多の七四カ国代表が出席され、また八月九日の長崎平和祈念式典には広島に続いて核保有国のイギリスおよびフランスの代表などこれまで史上最多の三二カ国代表が出席された。長崎にも広島同様の出席をされたかっかと考えるが、核投下国のアメリカ大使が広島の式典に出席された意義は大きく、ルース大使とともに、おそらくその出席を指示されたオバマ大統領の決断に心から敬意を表したい。というのは、アメリカ国内での国家の立場を反映した種々の異論がある中で、こうした行動をとることは大変な「勇氣」を要するからである。もともと大統領はプラハの演説で「核なき世界を目指す」と強調され、世界とアメリカ国内に大きな反響をもたらした。無論この理想は大統領の言説に留まつており、実行面での動きはまだ顕著に見られないが、少なくとも米国大統領としては前例のない言説であり、少なくとも世界の人々の意識に働きかけ、核が必要悪であるとの潮流から大きな変化の兆しを感じさせていることは間違いないところである。一方対照的に、菅首相は記者会見で「核のもたらす抑止力の有効性」が日本を取り巻く国際政治の現実の只中においてはなお存在する

ことを述べた。

私たちはこれをどう受け止めるべきか。ヘーゲルの言によれば、「核兵器を廃絶するという理性的であることこそ現実政治においても通用力がある」と判断されるのか、「核兵器をおのが政治体制維持手段になりうると考える国家があるとするれば日本も核の傘に留まるという現実的抑止力を是認する」外交政策こそ国民の安寧保護という理性的な政治目的にかなうのか、判断が困難な事柄である。しばしば二人のヘーゲルがいると言われるゆえんでもある。またラインホルド・ニーバーの言によれば、『平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して』（日本国憲法前文）、『変える勇氣』をもってあえて核兵器を率先廃絶して英知を総動員して新しい国際関係秩序を築く」のか、「理想を目指しつつも人間および人間集団組織の罪性ゆえ、いまだ『変えられない現実を受容する冷静さ』をもって今しばらく限定的国家による核兵器管理の道を行く」のか、「変えるべきものと変えられないものとを、識別する知恵」が問われるところである。

ヘーゲルは「ミネルヴァのフクロウは、たそがれがやってくるとはじめて飛びはじめ」（前掲書）とも言う。歴史という現実の中から理法を見出す知性の把握（知恵の女神ミネルヴァが情報収集・分析のため放つフクロウが象徴する）は、歴史展開が一段落してから（たそがれ時になって）可能となる意であろう。しかし人類の思索はしばしば歴史そのものに追い越されてしまうことが多いのである。またナシヨナリズムや経済グローバリゼーションや地球環境悪化など各面から押し寄せる津波に直面し、社会のあり方が大いに揺すぶられ個人の生の意味について確信が持ちにくくなり、自死という誘惑の声に常にさらされている現代人には、そうしたたそがれ時を待っている余裕はない。観想的であろうとしない責任的思索は、時間との競走という迫りを意識しなければならない。

ところで新約聖書・マルコ福音書一三章二一～二三節は、やがて多くの偽キリスト、偽預言者が現れて人々を惑わそうとすると、イエス・キリストによる警告を記している。人間の罪性という本質と取り組むことを回避していたずらに幸せな理想を語る「合理的なるもの」は偽キリストの類であり、人類に多くの災厄を与える。しかし同時に、同福音書一章二四節は、主イエスが「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」と言われたことを記している。ここには“realized eschatology”の端緒がある。人類は、この世の現実が決して閉塞状況の中にあるものでなく変えられ得るものであり、すでに御国の到来という新しい現実が超越から介入して古い現実と交錯して存在し始めていることを信じて行動することへ、導かれている。

核兵器はそれもたらず災厄の悲惨さ、その持続性を含めて人類史上最悪の発明であることはアインシュタインの悔いをまつまでもない。また核であれ管理の難しさは、他の銃管理などの例に照らしても言うまでもない。「核なき世界」という声が被爆国からでなく、投下国から出たことに、私たちは大きな歴史的意味深さを感じる。核抑止力という、一定の時代状況の中で役割を果たしてきた「現実」の合理性の一定の評価をしても、それ以上にその意義の限界を明確に認識し、「核なき世界」構築を目指して「変える勇氣」をもつて真に合理的なるものが現実化していく動きに私たちは関わるべき時が来ている。